

Japanese A: literature – Standard level – Paper 1
Japonais A : littérature – Niveau moyen – Épreuve 1
Japonés A: literatura – Nivel medio – Prueba 1

Wednesday 4 May 2016 (afternoon)

Mercredi 4 mai 2016 (après-midi)

Miércoles 4 de mayo de 2016 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

Instructions to candidates

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a guided literary analysis on one passage only. In your answer you must address both of the guiding questions provided.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

Instructions destinées aux candidats

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez une analyse littéraire dirigée d'un seul des passages. Les deux questions d'orientation fournies doivent être traitées dans votre réponse.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est de **[20 points]**.

Instrucciones para los alumnos

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un análisis literario guiado sobre un solo pasaje. Debe abordar las dos preguntas de orientación en su respuesta.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

次の文章と詩のうちどちらか一つを選び、設問に沿って分析し、解説文を書きなさい。
その際、二つある設問の両方に必ず答えること。

1.

春のうららかな陽気に誘われて、私はベランダに出て洗濯物を干していた。そよ風が顔に当たって気持ちいい。この時季の風はいつも草木たちの萌える香りがする。私は毎年この香りをかぐと、植物を育てたくてどうしようもなくなる。そういえば去年はミニトマトを育てたんだっけ。今年も何かを育てたいな。そう考えただけでうずうずしてくる。

5

しかし、ふとわれに戻ると、ベランダの隅にはすでに植木鉢がいくつも転がっているのだった。鉢の中にはミイラのごとくシワシワに枯れきった植物の残骸たち。すでに土にかえってしまったものもいくつか。そう、この鉢の数だけ、過去に私は植物を枯らしてきたのだ。

10

これらを見てもまだなお、植物を育てようというのか。悪いことは言わないから、おやめなさい、私！ 心の中で良識あるもう一人の自分が止める。しかし、苦い経験は時間と共に忘れていくもので、一年たつとやっぱり緑が恋しくなってしまう。小さな緑でも、そばにいてくれるだけで安らぐ。人は心のどこかでいつも自然を求めているものなのだ。

15

とりあえず根っここの張った去年の土を捨てようと、何げなく手近にあった鉢を手にとった。そのときだった。

鉢の中に緑がいることに気づいた。ものすごく背が低くて、土にへばりついているように見える。何だろう。鉢にぐっと顔を寄せてよく見てみると、どうやらそれはコケだった。

20

「何だあ、コケか」

もしかして去年のミニトマトがまだ生きているのではと一瞬思ったが、まったくの期待はずれ。タンポポやスマイレならまだしも、よりによってコケなんて。何ともシケたものである。そのまま土ごと捨てようとしたが、こんなコケでも一応、生きているんだと思うと捨てるのもしのびない。とりあえず私はこのコケを、そのまま鉢の中に置いておくことにした。

25

それからしばらくたった初夏のある日、私はバジルの苗を買って家に帰った。
ベランダでポットから鉢に植え替えていると、ふと、またあのコケが目に入った。

30 何だかこないだと様子がずいぶん違う。緑だった小さな葉のような部分は見ると無残に縮れ、干からびている。ああ、ついにコケまで枯らしたか。でもまあ、しかたない。もともと世話してたわけじゃないし。しかし、コケでさえ私に目をつけられると枯れてしまうのか……。

「いやいや、私はバジルに専念しよう」

気持ちを切り替えて、鉢に入れたバジルにたっぷり水をかけた。

35 それから数日後。その日は朝から雨だった。雨は一日中降り続き、翌朝ようやくやんだ。幼いバジルの苗が雨粒に打たれてつぶれてやしないか心配だったが、ベランダをのぞくと元気そうだったのでひと安心。それどころか、雨が降る前よりいくぶん葉が大きくなったように見える。ものは言わねど、こうやって日々ちやくちやくと成長を遂げる。これだから、やっぱり植物ってかわいらしい。

40 ニヤニヤしながらバジルを眺めていると、視界の隅にキラリと光る緑の物体が映った。「むむっ！ あれは……。」

何と枯れていたかと思っていた、あのコケだった。どうやって生き返ったのだろうか。しかも不思議なことに、以前よりもずっと緑が青々と鮮やかになり、ポリウム感も増している。

45 鉢を手に取り、よく見てみると、昨夜の雨のせいだろう、コケの先には小さな雨粒が無数につき、キラキラとまるで宝石のように輝いていた。何だかとてもきれいだった。「コケもなかなかやるじゃん」
とりあえず、「植物枯らし女」の汚名を返上。私はちよつとホッとした。

藤井久子『コケはともだち』(二〇一一)

(a) 作者のコケに対する思いはどのように表現されているか、解説しなさい。

(b) 文体上の特色と効果について述べなさい。

初夢

- 除夜の鐘をききながら
金色のみかんの皮に指を立てると
押し返すようにして老人が破れから首を出した
——ちよつとまあおはいり 中はあたたかい
(でもどうやってはいるの?)
穴をのぞきこむと頭から吸いこまれて
気がつくともかんの中にすわっていた
まるい部屋の壁はふわふわした白いものに覆われ
なるほど《中はあたたかい》のだ
老人の前には碁盤ごばんが置いてあり
彼は相手がほしかつたらしい
黒をとったわたしを軽く負かすと
にこにこして盆のみかんをひとつくれた
わたしがそのかぐわしい皮に指を立てると
そこからまたべつの老人が首を出した
——ちよつとまあおはいり
こうしてわたしはいくつのまるい部屋の中
みかんの中のみかんにはいりこんで遊んだことだろう
初日にめざめるとわたしのからだは
まぶしい金色のかおりに染まっている

多田智満子 『祝火』(一九八六)

- (a) 『初夢』というタイトルが与える効果について、主題と関連させながら論じなさい。

- (b) この詩には、読者の五感に訴える表現が使われています。その表現と効果について述べなさい。